

十一・熊本城と御城内御絵図 -絵図の空から城を見る-

しろはく古地図と城の博物館富原文庫 代表 富原 道晴

熊本城は石垣と建築物を含めた壮大な姿が特別史跡に指定され、姫路城、名古屋城とともに日本三名城の一つとして、また、現存天守十二城には含まれないが、復元天守や現存五階櫓である宇土櫓を始めとする城郭建築群は、姫路城とともに日本の双壁といえる。加藤清正は賤ヶ岳七本槍の一人として、また、伏見城地震の際の秀吉救出、さらには朝鮮の役における虎退治として、その武勇伝は江戸時代から読み本や錦絵に描かれている。熊本県民だけでなく、日本全国で慕われている。しかし、熊本城の加藤時代はわずか40年余であり、藩政時代の殆どは細川氏の熊本城である。それでも、熊本城と加藤清正は日本人の心から離れない。大坂城の秀吉、上田城の真田氏のようなものである。

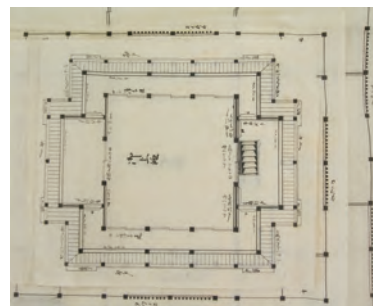
その熊本城において、壮大な復元整備計画が実行されている。主要部の総復元という歴史的な事業で、先に本丸御殿が復元され、話題となったが、これまでに、飯田丸五階櫓、末申櫓、戌亥櫓、太鼓櫓が、今後、竹之丸五階櫓、数寄屋丸五階櫓、御裏五階櫓、櫓方三階櫓等が計画されている。いずれも、一般の城では天守規模の建築群であり、五階櫓6基が並ぶ姿など他の城郭では想像もできない。完成すれば、城郭建築では姫路城を凌ぐ構成となる。これだけ、熱心に城郭復元に取り組んでいるのは全国的に見ても金沢城と熊本城ぐらいであり、将来の日本新三名城は姫路城、熊本城、金沢城になるかもしれない。歴史的にも佐々成政の改易、加藤清正の築城、西南戦争の舞台として著名である。

先月、原本行方不明の細密巨大な熊本城絵図を入手した。大きさが3～4mもあり、調査のため集会所を借りて広げてみた。細密な描画を読むためには絵図の上を歩かざるを得なかった。眼下に広がる城郭はまるで空中散歩、ドローンの世界であった。

絵図は御大工棟梁手控として、また、御作事方焼失時に作成されていた。早速、活動報告に掲載したところ、熊本城調査研究センターさんから連絡をいただいた。所在不明とした『御城内御絵図』の原本は、熊本藩主細川家お抱え絵師・狩野家の御子孫から

2014年11月14日に寄贈されたとのこと。富原文庫本御城内御絵図は熊本城再建後の1961年の写しだが、文化財関係者により、絵師の手になる詳細なもの。熊本城では本絵図を「18世紀後半の熊本城内の状況を確認できる唯一の資料」として、熊本城調査研究、復元整備の建築平面基本図として捉えられている。御城内御絵図とともに、『肥後国熊本城廻普請仕度所絵図』という寛永11年(1634年)城主細川忠利による幕府老中宛最初期の修理願絵図や熊本城天守の詳細な絵図『御天守方御間内之図』と一緒に発見された。

熊本城には熊本城南面図という見事な鳥瞰絵図が肉筆や木版、石版として広く流布している。そこに描かれているのは最盛期の熊本城の姿である。富原文庫には木版の版木が残されているが、整備復元計画により、その姿が現実の景観として再現される。まさに城郭ファン待望の快挙である。近年、あやふやな復元計画や根拠のない復元天守は輿論を買っているが、まじめな再現は大歓迎といえる。



御天守方御間内之絵図の天守部分



熊本城修理絵図の中心部分



全体図



天守周辺、いずれも御城内御絵図